

博士學位論文要約

論文題目： 日本中世仏像文化史論—南都文化圏・慶派仏師を中心に—

氏名： 杉崎 貴英

要約：

本論は、日本中世の仏像彫刻（宗教彫像）とくに鎌倉時代の南都文化圏あるいは慶派仏師に関わる題材を中心とする、17章の個別研究および附章5編・資料2編をもって構成したものである。

仏像・仏師を直接の主題としない章も存するが、それをも含めた全体には、日本中世において（新たに制作される）彫像の周辺・背景にいかなる文化史的状況が存したか、あるいは（古代以来の既存の像を含む）彫像をめぐるいかなる文化史的状況が生成していたかという問題意識が通底する。したがって本論の総体あるいは各論では、「中世の仏像」というよりもいわば「仏像の中世」をめぐる諸問題に比重をかけ、その立体的理解を目的として多角的アプローチ（一種の文化史学的研究）を実践するという方法を基本としている。

本論は次の4部からなり、それぞれに3ないし5章を配している。

第1部「仏師の社会的地位／信仰」

第2部「高僧と造像／仏師—解脱房貞慶をめぐる諸様相—」

第3部「造像の背景をなす文化圏／文化状況」

第4部「仏像を意味づける言説／場」

ただし各章で論じる内容は、必ずしもそれを配した部のテーマにのみ収斂するわけではない。副題に関していえば、初期慶派仏師の代表的存在たる快慶（?～1227以前）には第1～3部の、鎌倉前期の南都文化圏を代表する高僧である解脱房貞慶（1155～1213）については第2～4部の、それぞれ複数の章で論を及ぼしている。また、本論が企図する多角的・立体的探究は、総体としては第1部から第4部までの部立てに反映しているが、各章および附章のそれぞれにおいても、程度の差はあれ実践を試みている。

第1部では、仏像彫刻の専門工人である仏師の社会的地位、および彼ら自身の信仰の問題を探究する。多くが俗人であった奈良時代の仏師に対し、平安時代前・中期から僧名の仏師が現れ、中世にはそれが通例となる。僧形の工人たる仏師は、手工業者（道々の者・道々の輩）としての身分と、僧侶としての身分をあわせもつ者たちであった。その社会的地位の上昇は、名誉的なものではあれ寺院社会のそれに準ずるものとなってゆく。

第1章「勸賞譲与による仏師の僧綱位叙任」では、上記の特性に関して中世前期造仏界の縦断的把握をおこなうものである。すなわち定朝の法橋叙任を画期として後続する、仏師に対する僧綱位叙任の実態を、院政期中央主流仏師（院派・円派・奈良仏師）に散見する、自らに対する勸賞を子や弟子に譲って僧綱位の初任・昇任をはかる事例を総覧し考察した。それは社会的地位保持・継承の有力な手段となったこと、承久の乱後における政治的変動、

王朝的大規模造像の閉幕といった状況のなかで終焉をみることを論じた。

第2章「南都焼亡直後における一仏師の立場—奈良仏師成朝の訴えを読む—」はそれをふまえ、治承4年(1180)のいわゆる「南都焼き討ち」直後(すなわち「南都復興期」の初頭)における造仏界の横断的把握を兼ねて、奈良仏師正系最後の人物たる成朝(生没年未詳)に焦点を当てる。成朝が自らの権利を主張した二度の訴えを検討し、造仏の権利や僧綱位の獲得に対する成朝の意識を論じた。さらに第二の訴えを伝える申文の特性を、中世前期の仏師が差し出した文書の網羅的把握による検討を通じて明らかにした。

第3章「慶派仏師の信仰の場と私的造像—地蔵十輪院と六波羅蜜寺地蔵菩薩坐像—」では、仏師自身の信仰の様相に目を移す。ここでは慶派仏師の家(一門)の信仰の場という性格を重視し、運慶(?~1223)建立の私堂地蔵十輪院の関係史料を検討、運慶在世時における性格と没後におけるその後退を論じた。寛喜元年(1229)に供養された運慶追善像(湛慶造立、1873年焼失)については快慶も関与した可能性を新たに指摘し、運慶作の可能性が高い表題像については地蔵十輪院の遺仏とみる通説を補強した上で、来歴の問題に関して新案を提示した。

第2部では、僧侶の活動と造像あるいは仏師との関係について、近年に人文学の諸領域で研究が活況を呈してきた解脱房貞慶(1155~1213)に焦点をあてる。南都文化圏における貞慶の影響が多大であることに鑑み、在世中のみならず没後の動向をも視野に収め、4つの各論と3編の附章から考察する。

附章1「解脱房貞慶をめぐる靈山浄土信仰の造形」は、第2部の総論的・大観的展望および第4章への導入を兼ねるものである。貞慶の生涯を通じて活動の根幹にあった釈迦信仰、とくに靈山浄土への信仰という局面に焦点を絞り、南都文化圏の造形および言説への反映を、没後における春日信仰への影響を含めて見通した。

第4章「峰定寺釈迦如来像—造立をめぐる人々と信仰背景の構成—」では、正治元年(1199)の表題像とその像内納入品を分析し、貞慶ら造立をめぐる人々の構成と、靈山浄土信仰を軸とする信仰背景の構成を浮き彫りにした。さらに造立以後の諸事情を論じた上で、峰定寺における伝来に関し新案を提示した。

第5章「正法寺阿弥陀如来像—石清水八幡宮と貞慶・快慶—」の表題像は石清水八幡宮旧在で、近年に快慶の作風を反映する大作として再評価された遺品である。本章では、貞慶が同宮の丈六阿弥陀像の供養導師を建暦2年(1212)につとめたとする史料に着目、これまで建保年間(1213~19)造立とされていた表題作に比定できることを、造像願主の社僧祐清による海住山寺への所領寄進を傍証として論じた。さらに石清水八幡宮と貞慶・快慶との関係を考察し、貞慶と祐清との間をとりもったのが快慶である可能性を提示した。

第6章「現光寺十一面観音像—貞慶晩年の観音信仰、その継承と造像—」では、海住山寺所管の表題像について、同寺の中興者たる貞慶が鼓吹した観音信仰との脈絡を見出し、弟子覚真(同寺二世)が没する1243年に作期の下限を求めた。これを承ける附章2「南都復興造像と貞慶所縁の観音信仰」では、造立期間に貞慶十三回忌をはさむ興福寺食堂千手観音立像を、附章3「解脱房貞慶影響下の造像二題」では建仁3年(1203)の福智院地蔵菩薩像、および興福寺菩提院旧在釈迦如来像(13世紀半ば、1929年盗難)をとりあげ、造像への貞慶の影響を新たに指摘した。

第7章「解脱房貞慶と仏師快慶」では、近年に新たな提言が相次いだ貞慶・快慶の関係について、筆者の研究成果（第5章）を含めて総合的に検討した。「一針薬師笠石仏」に関する近年の新説を批判し、関係の始動と拡がり、両者没後の動向との関連性を考察した上で、嘉禄元年（1225）の東大寺釈迦如来像（善円作）が貞慶念持仏（快慶作、佚亡）の模刻である可能性を提示した。

第3部は、仏像の成立背景をなす文化圏あるいは文化状況の試掘に比重をかけた考察を通じて、既知の作例・史資料に対する新たな理解や視野の獲得を企図した5編からなる。

第8章「若王寺智証大師像と狛千光眼寺—南都文化圏周縁地域における天台の造像—」では、中世を通じて天台寺院が稀少な南都文化圏の周縁地域に伝世した天台の祖師像に着目した。聖教史料に見出した「狛千光眼寺」に原所在を求めうることを論証、千光眼寺の様相を考察した上で、南山城南部地域における天台寺門関係の作例と史資料の存在を論じた。

第9章「菩提山蓮光房と解脱房貞慶—南都文化圏における阿弥陀信仰者と造像環境—」では、貞慶が著述の末尾に提供先として明記する菩提山（正暦寺、奈良市）の住僧蓮光房の名が、同寺の寺誌的史料に法然（1133～1212）の弟子と記されていることに着目した。その信憑性を測定する作業を通じて、鎌倉時代の南都文化圏における造像環境の一端を考察し、貞慶の阿弥陀信仰者への態度を美術史的関心からとらえ直した。

第10章「砺波・常福寺阿弥陀如来像の背景—浄土宗と快慶派作例、その地域史的理解の試み—」では、表題像を快慶派作例として把握し、作期を1220年代に見定めた上で、成立背景の探索を試みた。浄土宗（玉桂寺旧蔵）阿弥陀如来像（1212年）の納入品から紐解かれた越中における浄土宗の普及、伝世環境が徳大寺家領般若野荘の荘域内であること、徳大寺公継（1175～1227）の浄土宗への帰依といった様相が重視された。

第11章「峰定寺阿弥陀三尊像の背景—水無瀬御影堂旧在の快慶派作例と後鳥羽院—」では、表題の快慶派作品について不明とされてきた来歴の手がかりを明治期の行政文書に見出し、明治維新まで後鳥羽院（1180～1239）をまつる水無瀬神宮（旧称・水無瀬御影堂）に伝世していたことを論証した。その上で、配流先の隠岐で没した後鳥羽院の追善供養仏として造立された可能性を論じ、快慶派と京都西山の地との脈絡に表題像をとらえた。

第12章「仲源寺千手観音像の背景—宮廷貴顕の山荘寺院の安置仏としての可能性—」では、従来専論をみなかった表題像の来歴を検討、東山鷲尾の地にあった四条家の山荘兼寺院「金山院」の主要堂宇「千手堂」の本尊として、寿永元年（1182）、藤原隆季を願主として堂とともに供養された丈六千手観音像に比定できることを論じた。また、金山院がのちに東大寺円照（1221～77）に寄進され、その京都における活動拠点となったことから、円照の千手観音信仰に関わる新たな機能を帯びたという消息を跡づけた。

第4部に収めた各論5編（および附章2編）は、中世において既存の古像あるいは新規に造立される像の性格を規定した言説（縁起・高僧伝そのほか断片的なものをも含む）あるいは場（像が安置される堂内空間のみならず、その安置堂宇の周辺環境さらにはより広い意味での寺院・堂舎の地理的位置といった多層的な構造をなす問題系である）の探究を主題ないし重点としたものである。近年の彫刻史研究の内外において議論が活況を呈してきた「靈験（性）」「生身（性）」、あるいは広く日本美術史研究に関して提唱された「造形の場（居場所）」という視角を、本論の目的のもとで実践したケーススタディーである。

第13章「神護寺板彫弘法大師像と土佐金剛頂寺—真言寺院の都鄙相関と靈験像の言説・模刻—」では、京都の真言寺院の造像が、遠国の空海靈跡に所在する原像に直接の範を求めた模刻という、イレギュラーな形でなされた事例を問題とする。正安4年（1302）造立の表題像に関する史料を検討した上で、鎌倉時代の弘法大師伝絵巻諸本に物語られる、土佐金剛頂寺に存したクスノキの立木仏の模刻を意図したものであることを指摘した。さらに附章4「土佐金剛頂寺の祖師像をめぐる補説」で、金剛頂寺側の史資料や近世土佐の地誌を視点として改めて詳解した。

第14章「中世の靈験仏とその制作者をめぐる言説」では、「靈験仏」すなわち靈験あらたかとみなされた／喧伝された仏像に関する寺社縁起（断片的な縁起的言説をも含む）において、像の成因がどう語られているかを問題とする。概観と類別を通じて、造像という過程が語られない例、語られるとしても仏師が介在しない例が大部分をなすという傾向を見定めた上で、仏師が登場する矢田地蔵縁起・穴太寺縁起・長谷寺縁起・壬生地蔵縁起・頬焼阿弥陀縁起について考察し、とくに後3者に認められる特色と意義を論じた。「靈験」「生身」の問題について、仏師の名声との間柄を考察したものである。

第15章「東大寺二月堂小観音と「生身」観」では前章を承け、東大寺二月堂の秘仏「小観音」を題材に考察した。まず「生身」観形成の前提として、機能と場（居場所）がどのように変化していったかを古代から中世にかけて追跡し、儀礼のたびに蔵から出され臨時的に機能する尊像から、二月堂への常置以後、恒常的に礼拝される尊像に変化し、「生身の仏像」言説を惹起するに至ったという経緯を、縁起類のほか起請文にも着目して論じた。生身信仰をめぐる議論でなされることの少なかった通時的・機能論的検討を、関係史料に恵まれた南都文化圏の個別事例において試みたものである。

中世東大寺の言説世界に関してはさらに附章5「東大寺の鯖の木と菩提樹」で、重源の『南無阿弥陀仏作善集』の一条に関し、第4章で論じた峰定寺釈迦如来像にも連関する注釈的研究を試みた。

第16章「中世の新薬師寺をめぐる諸様相」では、仏像の場たる古代寺院が中世においていかなる変容をなしたのかを問題とする。その好適な事例として、従来は断片的な言及にとどまっていた新薬師寺の中世に着目した。鎌倉～室町時代における本尊への信仰、南都焼亡直後からの興福寺信円の関与、興福寺出身の貞慶による造営、春日信仰との関わり、草創の地をめぐる信仰の変化などにわたり総合的把握を論じた。

本論の最終章とした第17章「冥府彫像とその場—展開・言説・限界—」では、中世に出現した地獄関係の彫像の造立例とその立地を初めて総覧し、関連する言説、および人文学諸分野での言及に目配りしつつ展開を跡づけた。さらにこの章では近世までをも視野に入れ、冥府彫像という局面において中世に成立と展開をみた様相の行方そして限界までを論じた。

本論では全体にわたり多様な史資料を参照・活用し、また彫刻史分野をはじめとする既存の調査研究成果をふまえているが、とくに本論の複数の章に関わる重要作例2件については別途資料をまとめた。すなわち資料1「峰定寺釈迦如来像研究資料—人文学諸領域にわたる研究の展開—」では、従来不明とされていた像内納入品の発見時の状況を伝える文献を提示した上で研究史の全貌を叙述し、資料2「浄土宗（玉桂寺旧蔵）阿弥陀如来像研究資料」では、書誌を網羅するとともに結縁交名の人物比定に関する研究蓄積を一覧化した。

如上の本論は、副題に掲げたように、南都文化圏・慶派仏師という相互に重なり合い絡み合う二つのカテゴリーあるいは問題系を中心とするものである。慶派仏師に関しては早くから彫刻史分野において、南都文化圏に関しては近年の人文学諸分野にわたり、研究が活況のもとに蓄積されてきた。すなわち本論をなす上で両者に重要性を認めるが故の積極的選択である。ただしこの選択には、基準作例および関係史資料の偏在という、研究条件を規定する事情が前提的に作用してもいる。

そこで本論の主題に関しては、11～13世紀における造仏界の動向を縦断的にとらえる研究(第1章)、藤末鎌初期における京都仏師の大作の年代と背景を確定する研究(第12章)、都と鄙が相関する様相のもとに作例の成立をとらえる研究(第10・11・13章)、中世を通じ全般的傾向・類別を把握する研究(第14章)、中近世を通じた実態を総覧的に見通す研究(第17章)を布置し、南都文化圏あるいは慶派仏師という範疇のみに収斂しない、日本中世仏像文化史の立体的把握を総体として企図した。